

もしもベルとアイズの子が未来から来たら。

棒人間EX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

未来から来た???とアイズの娘が父親の運命を変えていくお話。

目

次

プロローグ

1話

出会い

2話

一旦落ち着いて

未来から

僕

11 8 6 4 1

プロローグ

私－アイズ・ヴァレンシュタインは、現在ヨキ・ファミリアによる遠征の途中。

「皆！もうすぐで58階層だ。だから気を引き締めていこう！」

団長ーフィン・デイムナが言う。

その時、近くで炎の嵐が吹き荒れた。

「何だ▣新手か？」

団員達が驚く中、1人の女の子が走つて來た。

その子は後ろを向き

「ファイアストーム！」

と叫ぶ。

すると、先程見た炎の嵐が吹き荒れた。

炎の嵐は、女の子の前方に居たモンスターを巻き込んで消えていった。

そして女の子は振り返り、
目を丸くした。

誰を見ているのかと思ったが、どうやら私のようだ。

（何でそんなに驚いているの？）

私はそう思い聞こうとしたが、女の子のある言葉に遮られた。

「お母さん？」

私は、驚きを隠せなかつた。

「私、子供いないよ？」

「・・・」

皆が何を言つていいか分からず戸惑う。

そんな中、1人の勇者が現れた。

「えーと、とりあえず君の名前を教えて貰つていいかな？」

「フインだ。

「は、はい、分かりました。私の名前はアイル・ヴァレンシュタインです。信じて貰えるかは分かりませんが、私は多分、未来から来ました」

その自己紹介には、色々と言いたいことがあつたが、特に気になるのは、

「未来的ジャガ丸君は美味しいの？」

((何で!?)

その場所に居た全ての人がそう思つただろう。

「ごめん。アイズはちょっと静かにしてて。えつと、君は今、未来から來たと言つたかい？」

フィンが質問する。

「はい。私は、私のお父さんを救いにきました。後、ジャガ丸君は過去、というか今の時代の物を食べてないので分かりません」

「君は、お父さんを救いに來たと言つたね。それは何故？お父さんはもうすぐ死んでしまうのかい？」

「私の話を信じてくれるんですか？」

「完全には信じていないんだけれども、何というか、親指が疼くんだよ」

フィンは今まで以上に真面目な顔になつて言う。

「は、はあ。えつと、お父さんはあと6年後、この世から消滅します。」

その言葉に一同は耳を疑つた。

「消滅▣」

「はい。存在ごと、綺麗に。私のいた時代では、お父さんのことを覚えているのは、お母さんとあと数人しかいませんでした。私もお父さんがいた、ということしか分かりません」

「何故、お父さんは消滅してしまつたんだい」

その言葉に、一瞬戸惑つたようだが、答えた。

「皆さんは、黒龍の事は知っていますよね？」

アイルが、黒龍の名を告げた時、場は凍りついた。

「すまない、続けて」

フィンは話を続けるように促す。

「お父さんは、その黒龍を倒す為に、自身に神の力を入れて貰い、倒しましたそうです。しかしその反動で、お父さんは消えてしまつた」

「なるほど。しかし、すまないが続きは地上に戻つてからでいいかい。」

こちらも遠征中だからね

「はい、分かりました。えっと、私はどうすれば
「とりあえず僕達に着いて来てくれるかい？」

「はい」

1話　　出会い

僕一ベル・クラネルは今、ダンジョン16階層にいる。

パーティを組んでいる、リリルカ・アーデとヴエルフ・クロツゾは気を失っているため、2人を両手で抱え、必要最低限の物しか持っていないという、絶望的な状況である。

「ここから降りるのか」

目の前には、17階層へ続くであろう縦穴。

僕は覚悟を決めて、そこに入った。

「痛つ、ここが17階層。」

それから僕は、17階層最奥の大広間に向かって、歩き続けた。

そして、一度もモンスターと出会わずにたどり着いた。

広大で、本当に長大な、大広間。

まるで、屋敷の入り口のようだ。

中は整った長方形となつており、入り口から奥まで200Mはあるだろうか。

壁も、天井も、ごつごつとした岩石の塊で形成される大広間は、その左側の壁面だけ作りが異なつていた。

『嘆きの大壁』・・・

幸い、そこから唯一生まれるモンスターはない。

(よし。まだ間に合う)

そう思つた瞬間だつた。
バキッ、と。

不穏な音がした。

僕はその瞬間、走り出していた。

音の発生源の大壁からは、巨大な何かが出てくる。

僕は、足を止めて振り返つてしまつた。

そこには、灰褐色の巨人、迷宮の孤王『ゴライアス』がいた。

僕は、再び駆け出す。

全力でその場を離れる。

後ろからはゴライアスが追いかけてきていた。

「はしれ！走れ！走れ！」

ただひたすらに走つて、僕は、洞窟へと飛び込んだ。

その時、後ろから来たゴライアスの拳圧によつて、僕達は洞窟の奥へと吹き飛ばされた。

少し経つと、僕達は洞窟の出口から放り出された。

僕は地面に倒れていて、立つ事も出来ない。

僕は最後の力を振り絞つて言つた。

僕の、なかまを助けて、ください……」

一
卷之二

「つ、つ、つ、は?」

日を覚ますと僕は簡易的な布団に寝かされていた。

そんな僕になんとなくアイスさんに似ている女の子が駆け寄る

「お母さん、鬼さん起きたよ！」

といなから女の子は
僕の隣へ視線を向ける

僕は、黄を向いた。

そこには、僕を心配そうに見ているアイズさんがいた。

「え？ あ、アイスちゃん囮とうしてここには、それは『その子かお母ちゃん』

アイズせんま少し困つた顔をして、いたが、すぐこ答えてくれた。

「私は今、遠征の帰り。その子は私の娘? だよ」

卷之三

頭がまた痛か二た

2話　　一旦落ち着いて

僕は、もう何か色々壊れそうだつた。

アイズさんに子供がいるということを知つたからだ。

僕は、女の子の方を見た。

アイズさんと同じ金色の髪。

左眼しか開いてないが、アイズさんと同じ金色の瞳。

何故か驚いているが、アイズさんと似ている顔。

僕は分かつた、否、分かつてしまつた。

年齢的にあり得ない筈だが、この女の子がアイズさんの子供だと。情景に、子供が居ると。

「大丈夫?」

僕がぼうとしていると、アイズさんが声をかけてくれた。

「ハイ。ダイジョウブデス」

反射的に応えたが、片言になつてしまつた。

「あ、アイズさん!」この子は誰との子供ですか?」

僕はつい、リリ達そつちのけで聞いてしまつた。

「…えつ!えつと…イル?」

アイズさんは女の子の方に視線を向けた。

「その方に、私の事を言つていいですよ、お母さん。私、この人は何となく信用出来ますから」

「分かつた。ベル、この子は…・・・・・」

そうしてアイズさんは、イル・ヴァレンシュタインについて話してくれた。

僕は、その内容に凄く驚いた。

「えくく!!未来から来た、アイズさんの娘団」

「はい。イル・ヴァレンシュタインと言います」

「僕はベル・クラネルです。よろしく、えつと…「イルでいいです よ」イルさん」

僕達は、軽く挨拶を交わした。

僕はその時。大変な事を思い出した。

「あ！ぼ、僕の仲間は」

「そこで寝てるよ」

アイズさんが指を指して教えてくれる。

「はあ、良かつた！」

僕はとても安心した。

「随分と仲間思いなんですね」

「え？」

アイルさんが急に、そんな事を言つた。

「自分の事よりも、他人の事を優先してる。お母さんに、助けを求めた時だつてそうだつた。僕達を助けて、ではなく、仲間を助けてつて言つた。どうして、自分よりも仲間を大切に出来るの？」

その疑問に僕は、

「当たり前の事だから」

と直ぐに答えた。

それを聞いた2人は固まつていた。

「僕、何か変な事言いましたか？」

「… そんなことない。そういうえば、フイン… 団長に君が起きたら連れて来てくれつて言われてる」

「分かりました。えつと、団長さんはどちらに？」

「私が案内する。アイルも一緒に行く？」

「いえ、私はここでこの人達の看病します」

「リリ達の事お願いします」

「分かりました、ベルさん」

そう言つて僕は、アイズさんと団長さんの所に向かつた。

—————

テントに1人で残つたアイルは、閉じていた右眼を開く。

そこには、ベルと同じ深紅の瞳がある。

「… ベル・クラネル、私と同じ色の瞳を持つ男の人。もしかすると…」

アイルはテントの中で、そんな言葉を呟いた。

未来から

赤い髪の青年とサポーターと思わしき小人族の少女が寝ているテントの中でアイルは、先程見た白髪で真紅の瞳をした少年ベル・クラネルの事を思い出していた。

「自分よりも他人の方が大事だなんて…」

先程の発言、昔、お母さんから聞いたお父さんの事を思い出させた。お父さんは、それが例え自分を殺そうとした人でも、自分の事を裏切った人でも、困っていた時は助けたという。

「まるで英雄みたい」と私は言つた。

お母さんは、「みたいじやない、あの人は本当の英雄」とお母さんは言つていた。

そんな事を思つてゐるうちに、結構経つたのかベルさんが帰つて來た。

「すみませんアイルさん、遅くなつて」

「いえいえ、大丈夫ですよ。」

私は聞いてみた。

「ベルさん、あなたは私のお母さんの事をどう思つて いますか？」

「えつ？えーと、そ、それは情景（あこがれ）の存在かな」

「憧れ…」

目の前の少年が言つた言葉に、思い当たるスキルを聞いた事がある。

名前は確か、

「【情景一途】」

「それ、何かのスキル？」

ベルさんが聞いてくる。

「はい。確かに父さんが持つていた、成長に影響を及ぼすレアスキルだつたとお母さんから聞いた事があります」

「そ、そんなスキルが…？」

とても驚いている。

その時、

「ぐぐぐつ」

「リリつ！ヴエルフ！」

ベルさんのパーティーのメンバーが起きた。

「私は、団長に伝えに行つてきます」

「あ、はい、お願ひします」

そして私はテントを出て、団長の所へ向かつた。

リリとヴエルフが起きた。
声を掛けてみよう

あれ・・・声が、出ない。

変な記憶まで、何だ

モンスターが喋っている？

あれ？意識が・・・

そして僕は倒れた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

嫌な予感がする。

私は、ベルが居るテントへ走つた。
テントに入ると、

「剣姫団

「アイズ・ヴァレンシュタイン団

驚かれた。

「そうだ。おい、ベル！しつかりしろ！」

「ベル様！」

「どうしたの!!?」

ベルが倒れている。

「急に倒れたんです。俺達が気がついた時にいきなり」
リヴエリアを呼んで来ないと。

「～～～～～」

その時、ベルが起きた。

「どうして、ここに、僕は消えた筈。何で☒」

「大丈夫?」

私は声を掛けた。

「あ、アイズ☒」

あれ?

いつもならさん付けなのに。

「ここはどこですか?」

「18階層だよ。：：本当に、大丈夫?」

私はもう一度、声を掛ける。

「あ、れ?」

そしてベルは、また意識を失った。

僕は、一体誰?

僕

壊^守す気がつくと僕は荒れ果てた場所に居た。

僕の周りには、沢山の武器が落ちている。

僕の周りには、沢山の鎧が落ちている。

僕の周りには、沢山の人が落ちている。

「・・・つ！」

僕は言葉を発することは出来なかつた。

どれだけ周りに凄惨な光景が広がっていても、どれだけ身体がボロボロでも。

どれだけ愛する人を失い悲しくても。

ぼくにはもうなにもない。

数年前、愛する娘が居なくなり、敬愛する神は殺されて、そして英雄になつたあの時以上に酷い戦いが始まつた。

世界全体を巻き込んだ戦い。

バベルは崩壊し、ダンジョンだつた穴から沢山のモンスターが溢れ出し、人々を殺していつた。

僕は知つている。

その日、ダンジョンにいる仲間達に会いに行つた、竜女のことを。

僕は皆と一緒に必死に戦つた。

だけど無駄だつた。

どんどん穴から溢れ出てくる怪物によつて、1人、また1人と居なくなつっていく。

戦いは直ぐに終わつた。

僕達の負けて。

僕は愛する人と、生き残つた仲間達と逃げた。

けれど、それも直ぐに終わつた。

仲間達は追いかけて来た、モンスターと戦つて力尽きた。

愛する人は黒い風を纏い消えていった。

僕は、真っ黒に染まつた魂を、お祖父ちゃんから受け継いだ雷霆と共に放つた。

この日、オラリオは跡形も無く消えた。

ぼくにはもうなにもない。

ぼくはもうなにもできない。

ぼくはえいやうなんかじやない。

あれからどれくらい経つんだろうか？
僕には分からぬ。

オラリオの跡地で僕はずつと蹲つている。
幻覚が見える。

あの日死んでいつた仲間達が。
最期まで戦つた、本物の英雄の相棒が。

最後まで皆を必死になつて守つたものが。

僕は直ぐにでも死にたかつた。もう一度愛する人を見たかつた。
だけど、怖かつた。死んでいつた人達に何と言われるか怖かつた。
急に寒気がした。

ふと顔を上げると、黒い靄があつた。黒い靄は少しづつ僕の中に
入つていく。

声が聞こえた。

「僕たちの力で、この運命を破壊しよう。愛するひとをもつともつと
自分のものにして、気に入らない奴は全て破壊しよう」

僕はこの声に従う。破壊しよう。破壊しよう。このオラリオの様
に今度こそ、愛する人を壊すために。

「僕たちは破壊の神、アベル！さあ、始めよう。僕たちの物語を」
まるでその言葉を待つていたかのように目の前に現れる光の扉。
僕達はちょっと扉に「神の力」を入れて、入つていく。
とても小さい、白い兔と共に。

僕は、目を開ける。僕の目に心配してくれていた仲間達が映る。
僕、ベル・クラネルは決意する。

今度こそ、皆を守れる、愛するアイズを守れる英雄になると！